

○小田原の課題について

資料1

項 目	委員意見	委員名
【地域特性/まちづくり】	<p>・文化振興ビジョンを作成するためには、小田原市の将来構想との関連性が重要である。小田原市の優位性は東京から80キロ、時間距離で30数分（新幹線）。海・山が近く自然に恵まれていること。城下町・宿場町で様々な歴史・文化・伝統が残されていること。日本有数の観光地箱根を控えていること。二宮尊徳の出身地であること。などがあげられる。<u>この優位性を小田原市の将来構想にどのように組み込むかがポイントと考える。</u></p>	石塚委員長
	<p>・海・山・川などの自然環境、歴史を感じさせる町並み、躍進する商業施設をどのようにバランスよく組み合わせ、文化活動を展開していけるか。</p>	岩城委員
	<p>・過去の遺産だけに頼るのではなく、未来志向で、都市の価値を生み出す仕組みづくりが必要。</p>	鬼木委員
	<p>・小田原の中心市街地（錦通り、ダイヤ街、駅前通り、駅前中央通りなど）は、チェーン店の進出が激しい。（ある商店街では68店舗のうち半数以上がチェーン店であり、）地域の行事等への参加を依頼しても、本社決済が必要なこと等のことから、臨機応変に対応することが難しいため、<u>無関心であることが多い。</u></p>	杉崎委員
	<p>・城下町のイメージは小田原にあっているのだろうか、再考が必要。<u>イメージづくりを必要とする。</u></p>	杉崎委員
	<p>・文化というと、小田原の人は東京や横浜に出掛けて行ってしまふ。よそで済ませればよいのではない。</p>	神馬委員
	<p>・「面」で街全体の魅力を発信していく事が必要。 駅から旭丘高校まで、及び三の丸地区は、まさに「面」として小田原の魅力を発信出来る場所である。浅草や鎌倉、京都のような雰囲気のある町並み（城下町）を造る事が出来れば、ここが文化の発信地に成り得るし、集客力も十分期待出来る。（特に、三の丸地区は毎年駅伝で全国に中継されるので、魅力的な町並みが出来れば、あつという間に全国にその情報は伝わる。）</p>	大森委員
	<p>・文化振興のためには経済的な裏付けが必要であり、その基盤として人口、産業（地場産業・観光業・生産業など）等について長期的な展望に立った対策を考える必要がある。</p>	石塚委員長
	<p>・多くの人が、生まれ、生き、子孫を残し、死ぬ、といった生活のすべてを、この町の中で完結したい、また、たとえ、それができなくても訪ねてみたい、と思うような町づくりが課題であり、文化面では、これに向けて、都市としての魅力の向上に繋がる取り組みが必要である。 ・多くの人に愛される、そうした魅力のある町の姿は、価値観の多様性に比例して千差万別なところもある。かといって、様々な個別の課題があるなかで、これらに最大公約数をとる形で対応すれば没個性化し、かえって魅力を失ってしまうから、<u>基本的には、小田原らしい個性を基盤にして、その魅力をアピールしてゆくのがよいと思う。</u> ・その小田原の個性の源泉となるのは、やはり、日本のどこにもない独自の歴史と風土と考える。ある意味小田原なりの「分度」を守り、オールマイティになろうという欲を出さずに、これを大事にすべきだと思う。</p>	山口委員
	<p>・小田原も城下町・お菓子・かまぼこといった京都に負けない文化があると思うが、あまり認識されていない。</p>	露木委員
【人づくり/子ども/教育】	<p>・<u>人づくりの在り方を考えることが必要。</u>現在の日本の混迷は端的に言うと、戦後の偏差値教育の限界を露呈したものであると思う。<u>小田原市は厳しい環境に置かれても自立し生きる力を持った逞しい人をつくる教育を他に先駆けて打ちだし実践してみたらどうか。</u></p>	石塚委員長
	<p>・子どもの芸術鑑賞にお金をかけられない</p>	神馬委員
【文化活動/文化政策】	<p>・現在の市民文化祭は、小田原市文化連盟所属団体の発表会になってしまっていて、その期間は毎年3カ月にわたり固定化されており、鑑賞者も関係者中心で、<u>文化活動というものが一般の市民から、かけ離れたものになってしまっている。</u></p>	大森委員
	<p>・市民文化祭は、小田原市文化連盟だけ（文化祭の運営に参加出来るのは文連の幹部のみ）のものではない、<u>真の意味での市民文化祭へ変わる必要がある。</u>そうしないと、文化予算に対する市民の理解が得られない。<u>これからの文化は文化活動をしている人たちと関係者だけではなく、どんどん一般市民の中に入っていく、まちづくりに貢献していかなければならない。</u></p>	大森委員
	<p>・小田原市文化連盟に所属の有無にかかわらず、<u>今まであまり文化活動に触れる機会のなかった人たちに対する積極的な呼びかけが必要（創り手側と観客側の両方で）</u></p>	大森委員
	<p>・文化のプロの企画、運営組織が存在していない事。各団体任せでは、小田原市としての文化向上を実現するには限界がある。</p>	大森委員
	<p>・（小田原市に限ったことではないが、）文化芸術を身近に感じられるようにすることがもっとあっても良いのでは。</p>	鬼木委員
	<p>・芸術性と大衆性を兼ね備えた文化振興政策が必要である。特にプロの専門の方の追求の邪魔をしないことと併せ支援する姿勢、そして、その方々の小田原の文化等へ貢献できる仕組みづくりが必要。</p>	杉崎委員
	<p>・文化不況といわれる時代に、大勢の方が安価で気軽に文化に興味を持ち、親子で参加してくれるのがワークショップである。こういったワークショップを通じて、<u>感動や美の楽しさを知ることと思うが、その後の繋げ方を研究しなければ、一過性のイベントに終わってしまう。</u></p>	杉崎委員
<p>・個人（作家・社中）での参加の方向と個人の支援体制をつくり、活動しやすい基盤をつくる必要がある。</p>	杉崎委員	

項 目	委員意見	委員名
【文化活動/文化政策】	・市民文化祭を変えることが必要である。ただし、文化連盟（20連合会・約200団体）の解体等は小田原の文化にとって損失になる。（文化祭のあり方を文化ビジョンの中で話しあってほしい。）	杉崎委員
	・文化祭以外に、マロニエや、けやきの行政指導型のイベントの内容の把握。サポセン祭り、けやき祭、市展のあり方等の把握が必要である。また、文化政策課以外での文化性のあるイベントがあるがこれらの把握。	杉崎委員
	・グローバル化と少子高齢化という全世界・全国的な傾向の中、小田原市も地域経済や住民所得の低下、域内の社会関係(絆)の稀薄化、地域固有の文化・景観の喪失などの問題が深刻化するとともに、それらの問題に対して、 <u>経済・文化・市民力といった地域の総合力は優れているものの有効な打開策がとられている実感に乏しい。</u> 問題の所在は明確であり失敗を恐れず実際の対策を講じる段階に来ているにもかかわらず、その一歩が踏み出せないまま時間が浪費されている感が強い。特に文化振興については、本来、文化振興の手段であるはずの市民ホール問題が自己目的化し、その対応に人的・経済的・社会的資源が割かれ過ぎていると危惧される。	平井委員
	・情報が散漫	神馬委員
	・全国的な傾向だが、小田原市内や西湘地区の文化団体間交流の促進には、地域文化団体の意識改革が必要である。	間瀬副委員長
	・小田原市は平成11年に「おだわら文化のまちづくり」～行動へのアプローチ～を策定している。「7つの行動へのアプローチ」の内容を反映する必要があるか検討する。	間瀬副委員長
	・地域の文化振興の持つ公共性及びその必要性を小田原市民が共有し行動する仕組みを検討し、「文化振興ビジョン」では自治体の責務を明確にし、策定後の進行管理、調査評価などを行い、ビジョンの継続性と実効性が必要。	間瀬副委員長
	・コンサートや美術館に行っても、帰ってきて無機質な生活に戻ってしまうのでは意味がない。	岩城委員
	・文化にあまり関心のない人にどのように文化に触れてもらうかが課題である。	岩城委員
	・文化が生涯教育として扱われている。	杉崎委員
	・一般的に、文化活動はジャンルごとに縦割りになっており、そこに横串しを入れるべきである。	間瀬副委員長
	・財政が厳しい中、豊かな文化を育てるのは難しい。	石塚委員長
【その他】	・外から見た場合、小田原のイメージはかなり明確。城、かまぼこ、寄木細工など。しかしこれを変える位の強力なアイコン（目印）が必要。言葉を選ばず言えば、現代における「まつり」の存在。 ・横浜で現在行われている現代美術の祭典「横浜トリエンナーレ」も、まだ十分ではありませんが、ある種の「まつり」です。「現代美術」というお神輿を、市民の皆さんがかついでいるわけです。	鬼木委員
	・生活と密着する大衆文化をどのように見つけていくか、その時代の流行と生活文化が一般大衆(市民)にかみあえば参加を伴っていく。	杉崎委員